津波被害の農地に咲くそばの花
復興の年越しそばで新年を迎えよう

津波で被災した宮城県亘理（わたり）町の農地に白いそばの花が咲きました。花は結実・収穫・製粉を経て、そばの原料になります。食のみやぎ復興ネットワーク※が取り組む「わたりのそばプロジェクト」では、2013年10月4日、そば畑のある亘理町荒浜地区で「そばの花見会」が開かれ、近くの仮設住宅に住む方々やみやぎ生協のメンバー（組合員）など約120人が、そば畑の散歩と手打ちそばの昼食を楽しみました。

●震災、台風。だが、農家は決してあきらめない

亘理町は津波で農地の約8割が被災しました。除塩作業を終えて耕作できるようになったところもありますが、農地に水を運ぶパイプラインや排水機能が復旧していないため、稲作にとりかかれない土地がまだ多く残っています。

このためJAみやぎ亘理は、昔から米の転作作物として栽培してきたそばを被災した農地で育てることにしました。

そばは地力の弱いところでも育ち、種まきから収穫までの期間が短い作物です。町内の逢隈（おおくま）地区・山下地区では震災後いち早くそば栽培に取り組んでいて、収穫の実績もありました。

９月の台風で被害に遭ったそば畑。

「そばを育てるなら、食のみやぎ復興ネットワークで取り組み、商品化することで復興の後押しをしよう」と、大友良彦さん（JA全農みやぎ）らは、さっそく食のみやぎ復興ネットワークに提案。13年春「わたりのそばプロジェクト」がスタートしました。

「食のみやぎ復興ネットワークでは、栽培から、加工、流通まで一連の流れに取り組んだプロジェクトが行なわれています。食のみやぎ復興ネットワークとして取り組むことで、消費者の方もそばの実が粉になり、そして商品になってそれを食べるという体験ができます。栽培の過程を知っていてもらえるのは、他のそばにはない亘理のそばの特長になります」と大友さん。栽培に取り組む生産組合も決まり、亘理町の荒浜地区・逢隈地区・山下地区の農地約58ヘクタールの農地に種をまきました。常陸秋そばという品質の優れた品種です。

ところが9月、発芽したばかりのそば畑を台風が襲いました。特に荒浜地区では畑が水浸しになり、一部の圃場を除いてほぼ全滅してしまいました。

荒浜地区でそばを育てている齋藤勇紀さんは「昔そばを栽培したことがあるので今回も大丈夫だろうと種をまいたのですが、天候に恵まれませんでした」と残念そうです。それでも「そば畑はきちんと土地を耕しているので地力が出てくる」と土壌の回復に

「そばの花見会」に参加したみなさんで
そばの花を観賞。

期待を寄せます。

岩佐國男さん（JAみやぎ亘理）は「せっかく植えたそばが台風でやられてしまいました。でも私たち農家は決してあきらめません。今年のそばがダメなら来年にかける、今年の米がダメなら来年の米にかける、その定めのなかで生きていくしかないんです」と決意を語ります。

そばの製粉は、昔から亘理町とそばの取引がある山形県の宮川製粉が担当します。「常陸秋そばは全国で品質第1位に上がるほど優れた品種です。製粉業界は国産のそばを求めています。もっとそばを作付し、しっかりとしたそばを作ってください」。そう宮川洋一さん（宮川製粉）は生産者を激励します。

みやぎ生協メンバーの山家（やんべ）裕美さんは「震災にも台風にも負けず作物を育てていこうとする生産者さんの熱意が素晴らしい」と感動していました。

●たくましく育つそばに復興への思いを託す

阿武隈川沿いに設けられた会場からそば畑までは徒歩で約10分。震災前水田だったところには、ススキや蒲の穂が繁茂し、荒れた草地が広がっています。そんな中、白く小さな花の揺れている一画がありました。夏に植え、台風を乗り越えたそばの畑です。「これがそばになるんだね」「初めてそばの花を見た」。みなさん興味深げに白い花を観察していました。

会場では手打ちそばと野菜の天ぷら、亘理名物の「はらこ飯」が提供されました。手打ちそばの原料は、逢隈地区で昨年収穫されたそばの実を宮川製粉がそば粉にしたものです。

「そばの花見会」でのそば打ち実演の様子。

亘理町の仮設住宅から参加した方々は「私たちね、朝の9時から来て、時間あるからそば畑まで行ってきたの」ととてもお元気です。岩沼から参加したメンバーも手打ちそばに「コシがあって美味しい」と満足していました。

打ち立ての「そば」と「はらこ飯」を食べました。
隣の子の方が、おいしそうに見えるかな？

大槻克明さん（JAみやぎ亘理）は「こうして亘理やその周辺の生協組合員さんがそば畑に足を運んでくれる姿を見ると、亘理の農産物を待ち望んでいただいているんだと思って励みになります」とうれしそうに話していました。

栽培初年度から台風被害を受けた「わたりのそばプロジェクト」ですが、荒浜地区の一部と逢隈地区・山下地区のそばは順調に生育しています。収穫したそばは年越しそばなどに加工するほか、生協のメンバーや食のみやぎ復興ネットワーク参加団体からアイディアを募って商品化を進めていく計画です。

大友さんは、「痩せた土地でも早くたくましく育つそばは、復興に向けて困難を乗り越えていこうとする農家の姿とイメージが重なる」と言います。「自分たちの作った年越しそばで新年を迎え、復興に向けてまた一歩を踏み出そうと思ってもらえたらうれしいですね」と話していました。

2013年10月4日　食のみやぎ復興ネットワーク　わたりのそばプロジェクト　そばの花見会

※食を通した被災地の復興に宮城県内の業者等で取り組むプロジェクト。みやぎ生協を中心に、13年10月15日現在、229団体が参加。